

推薦の言葉

中原市五郎は私の祖父であり、昭和16年（1941）3月22日に亡くなった。私は同じ年の2月12日に生まれていたので、祖父とは40日足らず生を共にした。祖父は、わが国最初の歯科医学校を設立した石橋泉いしばしに因んで、この孫に泉せんとよむ名をあたえた。

さて、中原市五郎に関する伝記の類いは、彼の生前と死後に4冊だされた。日本歯科医学専門学校の卒業生で、小説家の島洋之助が、昭和11年に『富士見の慈父』を上梓した。同書が底本となって、日本歯科大学により、『中原市五郎先生略伝』が昭和28年に編纂された。

次いで、中原の郷里である長野県駒ヶ根市の郷土史家の宮下慶正が、平成4年に『歯科界の巨星 中原市五郎の生涯』を著わした。さらに、平成28年に日本歯科大学校友会（近藤勝洪会長）が、『考証 中原市五郎史伝』を出版した。

このたび、復刊される片岡繁男作『駒山の鷹―小説・中原市五郎』は、5冊目となる。

著者の片岡繁男氏は、九州歯科医学専門学校を卒業し、歯科医業のかたわら、九州の同人誌を中心に活躍した小説家であり詩人である。彼は、日本歯科医師会の『日歯雑誌』の編集委員としても、30年にわたって健筆をふるった。昭和52年に『デンタル・ダイヤモンド』誌に、

「駒山の鷹―小説・中原市五郎」を連載する。

いわば、この眠っていた小説を、同じ九州歯科大学卒業生で、作家の子息片岡英男氏が、増補・改訂して書籍に編纂したのが、本書である。

片岡繁男氏は、「私は日本の歯科医4万人（昭和51年現在）の中の一人として、先覚中原市五郎という傑出した人物の若き日の姿を、私なりに書き上げたいと思う」と、作家の尖鋭なモチベーションと高揚した創作意欲を書き記した。

編者の片岡英男氏もまた、「世に立つに必要なことは、目的と見透しと努力の三つである」という中原市五郎の箴言に共感し、片岡小説を通して人間中原市五郎に心酔したことをあとがきに吐露した。そこには、平成22年に長逝された父君への敬愛の情があふれている。

とにかく、私どもにゆかりのない片岡父子によって、没後78年にして、青雲の志を抱いた若き中原市五郎像に、改めて光彩が当てられたことは感謝の極みである。繁男氏は執筆に際し、市五郎の長男である中原 實に取材した。その中原 實の次男である私が、玉著の推薦の言葉を綴る……。そこには、脈々とつづく因縁を感じずにはいられない。

平成31年2月12日

日本歯科大学学長
中原 泉

執筆に当たって	6
プロローグ	15
慶応三年五月十五日	22
翔ける	43
生命すりあわせて	65
東京の坂	88
漂白	109
この道をこそ	134
貴志子	157
地はよし九段富士見坂	179
巻末エッセイ・私の中の医学と文学	202
編者あとがき	208

執筆にあたって

デンタル・ダイヤモンド社の山根さんから、歯科医先覚者物語として『小説・中原市五郎』の執筆を乞われたとき、私は重ねて「小説ですね」と問いかえした。『中原市五郎伝』であれば、ほかにまだ適当な人があるだろう、そんな思いが走ったからである。そう念をおした上で、

「私の中の文学と医学が、ようやく一つになった——と、自分で領けるようになりませんでしたので、お引きうけたいでしょう」

と応えた。そう応えながら、

「医学の中に、お前の文学を持ちこまれたら、かなわんな。やめてくれ」

と、かつて大学医局の指導者から（いや、上司という用語で、奉らねばならないひとから）叱責された日のが、鮮かに脳裏に蘇ってきたのであった。

それは、日本が、かの暗い太平洋戦争に突入する、その少し以前のことであった。

私が介補をつとめる入院患者が死亡した。舌癌であった。執刀者である上司が、死亡診断書の用紙を手に入っていたのに気づいて、私は誘われるように、

「病名は、やはり舌癌ということになるのですか」

と訊いた。日に日に栄養失調のために衰弱していく患者の経過を、私は知っていたからである。このときの私は、

（死亡の直接原因は、栄養失調というわけになるわけだ、な）

と自問自答し、それ以上の検討はできず、戸惑っている……という状態であった。すると、上司は、

「なんだと？」

と目をむいた。

「おれの手術に間違いはない。手術は完璧だ。疑う余地はなく成功だった。きみは……」
そこまで言ってから、

「おめえさん！」

と、その口調が変わった。

「文学だか何だか知らぬが、そいつをてめえ勝手に医学の世界に持ちこまれたんじゃないかなわんわい。そんな話は、おんなどいチャイチャするときにも、やってくれ」

思わず、私は立ちすくんだ。余りにはげしい氣勢であった。

私の問いかけは、決して上司の姿勢を攻撃するといった性質のものではなかった。素朴な

設問であった。私のなかの漠とした、捉えがたい『医学』と『人間の生命』との関わり合いについて(教示をねがう)ただそれだけであった。

しかし、ひるがえって考えてみると、私の質問には、きわめて重大な内容がひそんでいたのである。

それは、

——手術は成功した。だが患者は死んだ。

と、ということなのだ。

そして、上司が金科玉条としている西洋科学は、姿勢の執りようによっては、その論理が成り立ちうるのである。

そうして、私は、

——そのとき、人間の生命は……

と、教示を願ったことになるのである。

あるいは、そのとき私の上司は(即ち、日本の一部の先輩医学者たちは)、その設問に恠然となったのかも知れない。立ちすくんだのは、怒声におびえた私ではなくて、彼自身であったかも知れないのだ。

その日以来、彼の中で私の姿は、ますます異端の徒として醜くふくらみ、太っていったら

しい。

それは、いまから三十五年、いや、もっと以前(編者註、本文が執筆されたのは昭和五十一年十二月)のはなしである。

私が、私の中の医学と文学を、まったく一つに融和させたものとして受けとめることができるようになったのは、いつ頃からであったろうか。これまで日本歯科医師会雑誌に書き継いできた拙文を緻密に調べれば、その推移ははっきりとするであろう。

私は昭和三十年、日本歯科医師会の会則が改まり、会誌が希望購読ではなく、全ての会員に配布されるようになったときに編集委員に就任し、以来二十余年、ひきつづいて委員の席にある。ひきつづいて委員の席にあるのは、私ただ一人であるが、私が、

「歯科医学者であるわれわれは、一般医学者よりも、さらにいっそう『医の本質』を凝視しなければいけない。何故ならば、一般医学者は、患者の『死』によって『人間の生命』や『医の限界』をつねに問いかけられているが、歯科医学者には、この問いかけがさほどに頻繁ではない故に、絶えず己れ自ら問いかけていく必要があるからだ」

と、はつきりと発言し、執筆し、座談会を企画したのは、いつからであったろうか。

そうして——、現在、私が日本歯科医師会雑誌に筆を執っている『フーヘランドの医戒』や『県誌はつすい』その他を読んでいただければわかると思うが、私は、その確たる姿勢を

もって、〈偉大な開拓者・中原市五郎を対象に一つの作品を書く〉ことに、何らの遅疑も逡巡もないものである

十二月十五日。

私は、中原實学長を前にして、

「先生を、中原先生、中原市五郎先生を『中原先覚』とお呼びすることにして、話をすすめましょう」

と前置し、中原先生と私との『中原先覚』の談義がはじまった。(それが午前十一時三十分。)いいえ、中原先生が述懐してくださる中原先覚のはなしを、私は拝聴するだけで充分だった。途中で、

(ご老体だから、余りご無理をさせてはいけない)

と、自分の腕時計をそつと盗み見ようとするのだが、それが『父を語る』中原先生に対して失礼にあたる気がしてならないのだ。

(先刻から、来客を待たしてあるようだ)

そういう懸念も胸をよぎるのだが、中原先生の語調はますます昂揚し、銀髪がキラと輝く。幾度か、ドアがひらき、やっと、私たちも腰を浮かした。

「きみ！ もう二、三回、逢おう。きみ！ ばくに訊きたいことを個条書きにメモして、来

こよ」

そう言っ下さつたとき、腕時計をのぞいたら、午後二時を過ぎていた。

延々、たつぷりと二時間半。中原先生は、中原先覚を――、その身边を――、一部始終、語つて下さつた。

いま、中原先覚を委しく識っているということでは、中原先生のご親族や身近な人たちをのぞけば、私はあるいは指を折るくらい数少ない人間の一人であろうかと思う。

私は中原先生と対座したときの豊かな、みずみずしい想いを、いまあらためて噛みしめながら、執筆の心を固めている。

私たち作家は(対象の人物を、まず愛さなければ、小説は書けない)と、よく言う。たしかにそうなのだ。

そうして私はいま、中原先覚を愛する以上のものになっている。そうだ。この事は中原先生にも申し上げたのだが(中原先覚のなかに、私自身を、きれいに容れこむ)ところまでになっている。

私は日本の歯科医四万人(昭和五十一年現在)の中の一人として、中原先覚という傑出した人間の若き日の姿を私なりに書き上げたいと思う。

私は、とりわけ以下の点に目を見はらずにはおられない。

し九段、富士見原」で、第一回卒業生を前に一席フツた。

そこらは、私の小説作法の領分になるので、それは兎に角として、私は、ここに中原先覚の後輩である一人の歯科医として、中原先覚の「地域住民との密着」を——、「政治」や「学校歯科医」や「子弟教育」に対する姿勢を——、今日、ただいまの問題として、とり上げたいと思う。

私たちは、今日あらためて、中原先覚が独りで開拓した日本の歯科医学の道を、その一つの大きな流れを、丁寧にとどるることによって、そこから私たちへの垂示を真摯に汲みとる必要があると信ずるからである。

そうして私は、この『小説・中原市五郎』を読んでいたたく全国四万の歯科の先生方に、ぜひ、一人ひとり、中原先覚を、それぞれの心の裡に描いていただきたいと思います。

プロローグ

昭和五十二年、一月二十六日。中原實学長にふたたびお目にかかり『中原先覚』のはなしを承ることになった。飯田橋を並んで歩き出すと「いよいよ、本番ですね」と山根さんがいう。だまって私はうなずきながら、いつぞやテレビのインタビュだったかで見たことをふっと思い出した。ここでは映画監督大島渚の女房が亭主の日常を語っていたのだが、「それでも本番というときになるとクレージーになりますね」というのである。そのときは「なるほど」と聞き流していたが、いま「本番」ということばから（そういえば、私もこの二、三日少しかしい）と思い返した。

——少年市五郎が旧松本藩御典医戸田義方の医院に住み込んだのが明治十二年三月。このとき彼は慶応三年五月十五日（新暦六月十七日）生れだから、満で十一歳九カ月。院長戸田義方は旧藩主戸田家の一門で、漢方に蘭方を加えた医者。帆足万里の『医学啓蒙』という「漢蘭方ヲ雑ヘ用フ」いわゆる「雑方家（漢蘭折衷医）」である。

ところでこの雑方家についてだが、これに対しては「純粹蘭方家」というものが居たわけである。そして、さきの帆足万里は「蘭書ヲ大抵読習ヘハ其書モトヨリ漢ノ医書ト違ヒ療治